

# 碧水園能

## 喜多流公演

能  
芦刈  
佐々木多門

和泉流 狂言 因幡堂 深田博治

平成26年2月9日(日)開演午後1時30分

(開場午後0時30分)

主催 白石市古典芸能伝承の館 碧水園能楽堂  
後援 碧水園能に親しむ会実行委員会

白石市、白石市教育委員会

(公財)

白石市文化体育振興財団

白石商工会議所、白石市文化協会

お問い合わせ先 電話 012-411-57949

住所 宮城県白石市南町二丁目一番二三号

入場料

正面補助席、脇正面指定席 正面/席 6,000円

脇正面補助席 5,500円

自由席

4,500円

学生席 2,000円

(中学生以下無料 先着10名)

チケット取扱所

※平成25年12月6日(金) 午前8時30分発売開始  
電話受付 午前9時開始



「能楽図絵」河鍋暎翠画より

# 碧水園能

## 喜多流公演 番組

開演 一・三〇

### 狂言 因幡堂

大酒飲みの妻に愛想を尽かした夫。たまたま里へ帰った妻に離縁状を送りつけ、新しい妻を得ようと因幡堂の薬師如来に願掛けのお籠りをする。そこへ腹を立てた前妻がやってきて、「西門の階に立つた夫は薬師如来のお告げと思い込み、喜んで西門に向かうのだが……」。中世庶民の因幡堂信仰がうかがわれる狂言です。たくましくわいしい女と、気弱な夫の対比が笑いを誘います。

仕舞 難波

佐々木宗生

佐藤陽  
金子敬一郎  
友枝雄人  
塩津圭介

和泉流

狂言

因幡堂

夫 深田博治

妻 破石晋照

地謡

一・四〇  
二・二〇

難波の浦に住んでいた夫婦が貧しさ故に別れることになる。(妻シテツレは都に上って、さる家に仕え、若子の乳母となり生活が落ちていたため、別れた夫の行方を捜す旅に出る。夫の消息がなかなかつかめないので、旅の一途はしばらく難波の浦に滞在することにする。そこへ所の名物である声の葉を売って、貧しいながら世を渡っている男ジテと出会う。旅に付き添つてゐる家人(つま)は言売りの男にアシとヨシの違いを尋ねると、男は呼び名が異なるだけで同じ草であると言つて、面白く舞い語る。さらに難波の浦は「仁徳天皇が宮を定められた場所であり、御津の浜(ミツのハマ)とも言われる川われをも詰り、持つてゐる笠を難波の風物にいる」と例えて興じるのであつた。「笠之段」

実はこの言売りの男こそ、捜してゐる夫であると気がついた妻は、吉渡す時に、買う人が妻とわかり、未だ貧しい姿をしてゐる自分を恥じて逃げ隠れてしまう。

妻は夫が隠れた小屋に向かつて、変わらぬ心を訴えると、小屋の内より、「君なくて恥しかりけりと思つにぞいと難波の浦も住み憂き」(あんと別れて申し訳なく、そう思つにぞいとどこに住むのが情け無い)と夫の歌が聞こえてきたので、妻は返歌として、「悪しからずとこそ人も別れけめ何か難波の浦は住み憂き」(いいえ、未來が悪くならない為に別れたのですから、何んく思われるることはあります)。

「笠之段」という遊興の舞は、当時の囃し歌流行歌を取り入れたもの。夫は服装をも整え改めて、もとの武士のいでたちとなつて妻と相まみえ、再会の喜びの場となる。古来より夫婦の情愛を深める和歌の徳を讃え、最後は自出たる開連となり、春にふさわしい内容といえましょう。

狂言の「因幡堂」とともに、いつの時代も変わらぬ夫婦の姿が見えます。

能 芦刈

ワキ・従者 福王和幸  
シテ・日下左衛門 佐々木多門

大鼓 柿原光博  
小鼓 住駒充彦  
笛 小野寺竜一

難波の里人 深田博治

後見 塩津哲生  
栗谷浩之

地謡

佐藤塩津圭介  
佐藤友枝真也  
佐藤寛泰  
金子敬一郎  
友枝雄人  
狩野了  
内田成信

終演予定 三・四五



白石市古典芸能伝承の館 碧水園  
〒989-0248 宮城県白石市南町2丁目1番13号  
電話・FAX/0224-25-7949